

令和 7 年度 石川県総合教育会議

日時：令和 7 年 8 月 25 日（月）14 時 00 分～

場所：石川県行政庁舎 1109 会議室

1 開会

（司会：高橋総務部長） ただ今から石川県総合教育会議を開会いたします。司会を務めます総務部長の高橋でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

初めに、馳知事からご挨拶をお願いいたします。

2 知事挨拶

（馳知事）お疲れ様です。お久しぶりです。総合教育会議です。今日は2つの議題であります。石川県の教育振興基本計画について、皆さん方のご意見を賜り、反映させたいと思います。2つ目は、大規模災害となりました。特に奥能登における、教育の魅力化、県が関わるとすれば基本的には県立高校ということになりますが、当然高校があるということは、小中学校とも地域においては、ある程度連携してございます。総合的な奥能登における教育の魅力化、また児童生徒ばかりではなく、保護者の皆さんにも、その姿をお見せしていく必要があると思います。ぜひ皆様方の忌憚のないご意見をいただいて、教育政策に反映していきたいと思います。

ではお世話になります。ありがとうございます。

（司会） それでは議事の方に移らせていただく前に、本日はお手元にタブレット端末を用意しておりますのでそちらで資料をご覧ください。また、ご発言の際はマイクをオンにしてからご発言ください。ご発言後、マイクをオフにしてください。

それでは議事の方に移らせていただきます。今回の総合教育会議では教育振興基本計画の策定について、また震災に係る奥能登地域の取組について、という2つのテーマを設けまして、まずは資料にて、現状等を説明しました後、意見交換の時間とさせていただきます。なお本日の会議は90分程度を予定しております。

それでは事務局より説明をさせていただきます。

3 議事

（1）教育振興基本計画の策定について

（北島教育次長） それでは第4期石川の教育振興基本計画についてですが、現在の策定作業の状況等について説明いたします。

まず本計画の位置付けの確認でございますけれども、教育基本法に基づく本県の教育政策に関する基本的な計画でありまして、地方教育行政法において定めることとされております、教育、学術および文化の振興に関する総合的な施策の大綱として位置付けている計画になります。

現在の計画は第3期計画でありまして、計画期間は令和3年から7年度までの5年間となっております。計画の内容でございますが、次のページをご覧ください。

これは現行の第3期計画の体系を示したものとなります。一番左側にお示ししております基本理念、「未来を拓くこころ豊かな人作り」のもと、右側、4つの目指す人間像、そしてさらに右側、8つの基本目標を設け、この基本目標をもとに様々な施策の方針を示すという構成となっております。内容は記載のとおりでございます。

現行の第3期計画は、本年度が最終年度、終期となりますので、次期計画の第4期計画の策定を行うため、次のページとなりますが、有識者等で構成する第4期石川の教育振興基本計画検討会議を設置し、現在策定作業を進めているところであります。

検討会議の構成メンバーにつきましては、この表のとおり、大学教授や経済団体、PTA、校長会の代表者等、22名の方々に委員をお願いしております。

次のページですが、第4期の計画策定の策定に向けた基本的な考え方でございますが、基本理念および目指す人間像は時代を通じて大きく変わらない、本県教育の基本的な方針としまして、第4期計画にも引き継ぎたいと考えております。その上で、教育における被災からの復旧・復興、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実、ウェルビーイング、教育DXなど、近年の教育を取り巻く状況の変化に対応した計画にしていまいります。

また第3期の計画策定後に策定されました、国の第4期計画、本県の石川県成長戦略、石川県創造的復興プランを踏まえた計画といたします。次のページをお願いします。

先月の24日に第1回検討会議を開催し、次期計画の策定に向け教育を巡る現状と今後の課題について議論を行ったところであります。各委員からは様々なご意見をいただいたところですが、主なものとして、例えば教員を目指す学生が働き方への不安から、就職をためらう現状があるため、大学などで現職教員が教職のやりがい伝える機会をもっと増やすべきであるとか、DX分野、AIがかなり進んできていることから、AIを本格的に活用し、教員の業務改善や、個人の認知特性に応じた授業を実験的に行うなど、技術を活用した個別最適な学びを目指してはどうか、AIによって簡単に正解が得られる時代においては、思考の過程が重要であり、教育方法としての思考過程を見せ、自覚させる方法をもっと強調すべきである。あるいは、石川の創造的復興担う人材育成の視点を、県の方針として盛り込むべきである。学びの選択肢の少ない石川県における不登校の子どもたちをどのようにサポートしていくのかを考えていかなければならない。奥能登の高校の魅力化は喫緊の課題であり、具体的な方策を議論するための部会を設けてはどうか。といったご意見をいただいたところです。最後のページになります。

第4期計画策定に向けた今後のスケジュールであります。11月中旬ごろに中間取りまとめとして計画の原案を作成し、その後、パブリックコメントの実施等により県民のご意見等を広く聴取した上で、来年2月頃に最終案の取りまとめを行うこととしております。

また、計画案につきましては、適宜、本日同様、総合教育会議において協議してまいりたいと考えております。

なお、こども基本法で定められた子どもの権利擁護の指針に基づき、県内児童生徒を対象としてアンケート等による本県教育に関する意見の聴取も実施しております。現在、この調査結果の取りまとめ等を行っているところでありますが、子供たちの意見についても、計画に反映してまいりたいと考えております。教育振興基本計画に関する説明は以上でござ

ざいます。

(2) 震災に係る奥能登地域の取組について

(樋口学校指導課長) 震災に係る奥能登地域に係る取組についてご説明いたします。資料2の1ページをご覧ください。

震災に係る奥能登地域に係る取組としては、2点ございます。

1点目は、これまでも実施してきた地域の資源を活かしたふるさと教育に加え、創造的復興をテーマとした取組を加えたもので、今年度は、奥能登5校に復興探究コーディネーターの配置、それ以外の全日制県立高校33校を対象とした能登でのフィールドワークを通じた防災教育を行っております。

2点目は、生徒の学習機会の充実に向け、奥能登地域の高校をモデル校とした遠隔授業を実施する取組でございます。1枚お捲りください。

復興探究コーディネーターの配置についてご説明いたします。奥能登の県立高校5校に、7月から民間のノウハウを有する復興探究コーディネーターを2名配置いたしました。復興に向けた課題解決に取り組むための探究活動を進め、復興を担う人材の育成に取り組んでまいります。

コーディネーターの主な役割は次の3つです。1つ目は、地域の教育資源を活かした学習活動の支援。2つ目は、県内外の高校生との交流活動などの支援、3つ目は、各学校と市町や地域の方々との連携体制の構築でございます。コーディネーターの支援により、各学校の特色や強みに一層磨きをかけたいと考えております。これまでのコーディネーターの活動についてですが、5校を定期的に巡回し、各学校の探究活動における現状と課題の把握、各自治体や地域の関係団体から学校との連携に向けた要望の聞き取りなどを行っており、明日8月26日には、5校の教員を対象に合同研修会を実施し、各学校の探究活動の取組や課題等を共有する予定であります。のちほどコーディネーターからお話があります。

能登でのフィールドワークを通じた防災教育でございます。

奥能登地域以外の全日制県立高校33校の生徒約2,000人が能登を訪れ、震災遺構の見学や、震災を経験した語り部からの話を聞くなどの活動を通して、防災や減災に関する学習を行っております。

訪問先は、各学校が設定したテーマに沿って決定しており、8月下旬までに、14校約600人が参加し、出張輪島朝市や總持寺祖院、和倉温泉などを訪問しております。また、移動中のバスの中では、地質学の専門家が同乗して能登半島地震の発生のメカニズムについて解説し、各訪問先では、地元の語り部が生徒を案内しながら、被害の大きさや、復興に向けた各地の取組を伝えております。また、学校での事前・事後学習も通して、生徒は現地での学びを深化させ、防災意識を高めるとともに、ふるさとの価値を再認識しているところです。

参加生徒からは、人と人との関係を大事にし、互いにサポートし合うことが災害を乗り越えることにつながると学んだ。被害に遭いながらも、あきらめず復興しようとする人たちの心の強さを知った。各地の現状や歴史を知り、復興したらまた行きたいと思った。な

どの感想が寄せられております。

次のページをご覧ください。遠隔授業モデル事業についてでございます。

奥能登地域の高校は、地域唯一の高校として、多様な進路希望に応じた教育が必要です。入学者の減少に伴い、各校が行う全ての科目に教員を配置することが難しい状況になりつつあります。県教委では、こうした状況に対応するため、今年度よりＩＣＴ機器を活用して、学校間での授業配信による遠隔授業を試行的に実施することとしました。モデル校は、輪島、門前、能登、飯田高校の４校としており、輪島・門前高校間で「家庭」の授業、能登・飯田高校間で「情報」の授業、これらを遠隔授業を行うこととしております。

本日及び明日、遠隔授業に係る機材を各学校に配置することとしており、２学期以降、各教科１５回程度の遠隔授業を実施する予定であります。通常の対面授業と異なる状況において、授業者や受信側に配置される職員がどのような点に留意すべきか、より効果的なＩＣＴ機器の活用方法はないかなど、遠隔授業における学びの質の保障に向けた課題の洗い出しを行い、次年度以降、さらなる拡大を検討してまいりたいと思っております。以上でございます。

（司会） 今、事務局からの説明で、復興探究コーディネーターに関する説明がございましたが、本日はコーディネーターの木村コーディネーターと中川コーディネーターのお二方にご参加をいただいております。今ほどの事務局からの説明の補足や、またこの２ヶ月の活動を振り返っていただいて、現状や課題等、木村さん、中川さんのお二方からも一言いただければと思います。

（木村コーディネーター） それでは、奥能登地域における高校魅力化推進事業についてご報告させていただきます。奥能登５校の高校魅力化推進コーディネーターを務めております木村聡と申します。

教育企業のベネッセコーポレーションで約１３年勤めた後、２０１８年に能登町に移住して、今年の６月まで約７年間、能登町、それから能登高校にて魅力化コーディネーターを務めました。その中で町営の塾の運営や、能登高校での探究学習のデザイン、生徒の伴走支援、そして県外生徒の募集活動や、国内留学期間中の体験サポートなどをしてきました。そして７月から奥能登の５校の高校魅力化推進コーディネーターを務めております。本日は皆様にご報告の機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。ありがとうございます。ここで座って失礼いたします。

実は、週末に喋りすぎて喉を痛めています。というのも、高校生を全国から募集する地域みらい留学の合同説明会が東京で開催されておりまして、能登高校の募集説明会を行ってきたからです。２日間で９００組近い来場者があり、全国から８５校の公立高校が集まった説明会でしたけれども、能登高校のブースにも５５組の中学生とその保護者がひっきりなしに訪問をしてくださいました。説明でも大変だったんですけども、高校の特色である水産とか農業に興味がある中学生もいましたけれども、多くは奥能登のような自然豊かな環境で一度きりの高校生活を送ってみたいという思いを持った都市部の中学生たちでした。豊かな自然環境と独特の伝統文化を持っている奥能登の国内留学先としてのポテンシャルを改めて感じた週末でした。

ということで、すいませんちょっとお聞き苦しいかもしれませんが、どうぞご容赦ください。

まず高校魅力化についてですけれども、高校魅力化とは学校と地域が連携をして、生徒がこの高校で学びたい、この地域で人生一度きりの高校生活を送りたいと心から思えるような、独自の魅力や特色を持つ教育環境を、高校と地域、すなわち県や市町、保護者や地域住民が連携して作り出す取り組みです。

高校全入時代の今、奥能登の高校には小規模校であるがゆえに、希望する進路、それから義務教育段階までの学習経験や習得状況、能力や適性、興味関心に関して一つの高校の中に多様な生徒がおり、またこれからも入学してきます。高校魅力化の取り組みを通じて、そうした多様な背景を持つ生徒1人1人の能力が育まれて、興味関心が満たされるような教育環境作りが奥能登の高校で求められています。

高校を奥能登に残すことは、それ自体が目的なのではなくて、子どもたちに選ばれる高校作りと、それから高校生活の環境作りの結果であるべきだと思います。本質的な目的は時代環境の変化や震災による環境悪化を乗り越えて、生徒1人1人の資質能力を十分に伸ばし、1人1人が希望する進路を実現できる教育を奥能登で提供すること、そして復興していく奥能登の未来の地域社会を担う人材を育み、送り育てることです。これが奥能登での高校魅力化の本質であり、決してぶれてはいけない軸だと考えています。

そのためにも生徒、保護者、地元自治体や地域の皆様、そして教員との対話を通じて、地域とともに、復興を支える地域の人材育成機関として、地域から必要とされる高校を築いていく姿勢が必要不可欠だと考えます。

奥能登高校の現状認識ですけれども、奥能登の5つの高校と各市町へのヒアリングを通じて、現状が多様であるということを確認しております。各高校にはそれぞれ特色や強みがあり、それらを伸ばしていく必要があると感じています。と同時に、奥能登5校を魅力化・特色化していくに当たっては、解決すべき課題も見えてきました。特に現状と課題を3点、共有させていただきます。

まず探究学習についてですけれども、奥能登5校においては、各地域の様々な関係者と連携し、協力をしながら、現在でも推進をされています。しかし一方で、高校としての総合的な探究の時間の進め方や取り組み内容、学びの質や深さにはばらつきがあるというのが実態です。何のために探究学習に取り組むのか、あるいは生徒にどのような資質能力を身につけてほしいか、というビジョンを学校全体で共有して、学校全体の取り組みとして探究学習を位置付けている高校もあれば、各学年や担任の先生の取り組み方に委ねられているという高校もあります。

後者の場合は、今後は総合的な探究の時間を、高校の教育目標と関連させて、学校全体でどのように位置付けて体制を作り、活動ありきではなくて、生徒の成長をどのように促していくか、検討を進めていく必要があると考えます。

次に、学校全体の魅力化に向けた取り組みについてです。

震災後、社会環境の大きな変化や時間が10年、20年先に進んだと言われるような奥能登の人口減少、少子化、そして下がる一方の各高校の定員充足率を踏まえると、奥能登の高校がより充実した学びを提供するための改革の必要性は、多くの高校や市町が認識しています。

一方で、高校魅力化や特色化の必要性は理解できるが、現状でも多忙を極める現場の負担感がさらに増えるので進めにくいといった懸念や、県立高校の魅力化・特色化は県庁や県の教育委員会が解決すべき課題なのではないか、といったご意見も伺っています。

奥能登の未来を担う人材作りには、高校魅力化による教育環境の充実が鍵となるはずで、そのためには、高校単独ではなくて、市町や地域の関係者と高校魅力化に向けたビジョンを共有しながら、ともによりよい教育環境を作っていくことが不可欠だと考えます。

そして奥能登の高校魅力化・特色化を進めるために最も重要かつ早急に手当すべきだと考えるのは、教員の皆様の勤務実態や生活環境の現状です。高校の魅力化は教員にとっての魅力化でもあるべきだと思います。

奥能登の先生方は、震災前から小規模高校特有の忙しさを抱えています。具体的には、小規模高校の先生は、1人が多種多様な科目を受け持って授業を行うため、大規模な高校と比較すると、たとえ持ち授業数が同じだとしても、授業の準備やテストの作成にかかる時間は多くなります。加えて、震災復興の支援によって、外部からの支援や連携等の機会が増えた結果として、奨学金の対応であったり、連携窓口の業務であったり、イベントの引率対応であったり、またそれらに付随する会計事務など、本来の教務以外の事務的な作業が増えていて、教務に力を注げないという声が聞こえてきます。さらに、今年度の教員の人事異動では奥能登5校に19名の新規採用の教員が配属されています。裏返せば、同じ数の経験豊富で各高校を支えていた先生方が、奥能登から離れたことになります。このことが奥能登5校の先生方の疲弊を招いていることは指摘せざるを得ません。

また生活環境も課題です。単身者用の仮設教員住宅が奥能登の玄関口である穴水町に設置されていますが、そのため能登町や輪島市、珠洲市まで通勤される教員は通勤時間が非常に長く、また世帯者も単身赴任や別居生活を強いられているという実態もあります。この状況は決して奥能登で教員を続けたいと思えるような環境とは言えないかなというふうに思います。

そして、奥能登ではガソリン代が金沢地区と比べて1Lあたり10円近く高くなっていると思いますが、この状況で金沢地区の勤務者には手当がついていると聞いていますが、奥能登地区の勤務者には手当がついていないということに奥能登の先生方が不満を抱いているということもこの際お伝えしておきます。

教員の皆様は奥能登で暮らす人々と同じく被災者であり、被災地の住民でもあります。被災地で生活しながら日々の教育を支えてくださっていることを我々は念頭に置いて、もっと敬意を払うべきかなというふうに考えます。先生方のウェルビーイングを改善して、生徒の成長と高校の未来を考える時間的・心理的余裕を生み出して、先生方の能力を100%またはそれ以上発揮できるような環境を作ることが、高校魅力化と探究学習の充実を推進する上で不可欠であると強く感じております。以上です。

(中川コーディネーター) 続きまして、中川よりご報告させていただきます。私はNP〇カタリバに所属しており、東日本大震災の当時は、宮城県の女川中学校で職場体験のコーディネートをさせていただいて、今回、能登の震災からの復興に教育の側面から携わらせていただくというお役目をいただき、大変感謝しております。

カタリバでは、小規模な公立高校の探究学習をオンラインで連携させていく、それによ

って探究を深めるという取り組みとともに、文科省からの委託事業で、遠隔授業・通信教育を推進する11の自治体の教育委員会に対して、伴走支援を行う業務をしてきたので、そこで得られた知見などを生かして、今回の業務に貢献していきたいと思っております。

先ほど木村が申し上げた奥能登の現状を踏まえて、我々コーディネーター2人が進めていく今後の活動の見通しと、魅力化を進めていく上で大切だと思ってることを申し上げます。

1つは、奥能登5校の様々な先生方にお話を聞いて、魅力化・探究推進状況は、各校によってバラつきがあるという認識のもとで、先生方は学校をこうしたいという思いを皆さん持っていらっしゃるの、そういった思いに寄り添って伴走していくことが、コーディネーターとして大事だと思っております。

探究学習の充実という点に関しましては、教育課程の中核として探究学習を位置付けられており、探究の先生方が各校で頑張ってもらっている。先生方が奥能登5校でお互い相談し合えるような環境作りだったり、情報交換できるような関係を作っていくために、先ほどの教育委員会事務局からもお話ありましたが、各校の先生方がオンラインで顔合わせを8月末に行って、各校の課題だったり、状況に即して、次の視点は何かってことを考えていけるような機会を秋以降作ってまいりたいと思います。また来年度に向けて、各校の要望に応じてカリキュラムの設計だったり、学校の体制作りを伴走支援していきたいと考えております。

学校全体の魅力化に向けては、既に着手している県もあるんですけれども、各市町と連携度合いがまちまちですので、各市町に対して魅力化とは何なのか、魅力化してることが市町にとってどんな意味があって、こういったプロセスで進めていけばいいのかということ情報を提供し、一緒に連携していく下地作りに取り組んでいきたいと思っております。

また各校単独では魅力化していくことはなかなか難しいところもありますので、市町とより協働していけるよう、地域の声だったり、保護者の学校への期待を聞き取り、一緒に考えていくというようなワークショップを開催していきたいと思っております。

最後に、奥能登5校の魅力化を推進する上で大切にしたいことをご報告させていただきます。県としての魅力化のビジョンを持つということが大変重要と思っております。既に先ほどの振興計画の議論の中でも出てきてはおりますが、各校の魅力化への受け止め方だったり、認識がバラバラな現状に対して、県として各校にどんなことを期待していくのかというところを明確化するとともに、高校の魅力化・特色化を持続的にやっていくための、地域と学校の協働のあり方を提示していくことが重要かと思っております。

また生徒1人1人が学力を伸ばしていくためには、1人1人に合った学習環境を作っていくことも急務と思っております。現在、奥能登の多くの高校では習熟度別の授業は既に行われておりまして、英語・数学を中心に2段階程度に分けて習熟度別クラスをやっております。ただ、生徒の学力差がどんどん多様化していくところもありますので、それをいろいろな技術・教育方法をもって、どうやったらやっていけるかということを県として議論していく必要があると思っております。

また、奥能登の高校を回っていると、実は国公立大学を目指す生徒がうちの高校は少ないので、他校の生徒ともっと繋がり合えるといいんじゃないか、遠隔授業と一緒に授業していく意義はそういうところにもあるのではないかと回りながら感じております。

生徒1人1人に合った環境を作っていくために県としてのビジョンを示すことがとても大事なんですけども、一方で各校の先生方、それぞれ個別に頑張っているところもありますので、各校の独自の取り組みとバランスを取りながら進めていくことが重要と考えております。

また先ほどコーディネーターの活動のところで申し上げたことと重複しますが、各校における魅力化ビジョン作りを県としても推進していくことが必要かなと思っております。高校と市町、地域の関係者が一体となって魅力化を推進していけるように、ビジョンを共有し、地域の関係者と対話をしながら、市町と一緒に高校はどうあるべきか考えて、その結果として地域の独自の資源を生かした魅力あるカリキュラムをどうしたら作れるかというところが今後の議論になってくると思います。

最後に、木村も申し上げましたが、教員1人1人が力を発揮できるような環境作りがとても重要だと思っております。私は民間企業に勤めていた経験もありますが、トップや経営層から、働きやすい環境、働きがいのある環境を作っていきたいんだというメッセージももちろん大事ですし、例えば会計事務を楽にあげるとか、ちょっとしたことでとても嬉しいものなので、そういった具体的な施策を県としてやっていきますというメッセージを示していく必要があるかと思っておりますので、まずは、各校の状況を踏まえて教員に負担がかからない形で実態を把握していくことが大事だと考えております。

いろいろと申し上げましたが、石川県としても各市町各高校としても、それから教員1人1人にとっても、それぞれが魅力化をやっていきたい、魅力化でこういう形の高校ができたらいいなという思いを共有し合いながら、皆さんで力と知恵を合わせてやっていけるように、微力ながら頑張っていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。以上です。

(司会) 木村さん、中川さん、ありがとうございます。それではここからは意見交換の時間とさせていただきます。議事進行につきましては馳知事にお願いいたします。

4 意見交換

(馳知事) この後また今日の議題に沿って意見交換をさせていただきますが、最初に今ほど中川さんと木村さんからお話いただきまして、御礼申し上げます。ありがとうございます。

私は冒頭でちゃんと報告した方がいいと思いますが、当面、奥能登の県立高校5校は、整理統廃合や再編をする気はありません。まず申し上げます。私の方針です。理由は、距離的には見ていただいておりますように、各市町に1つは高校があるということの意味をご理解いただきたいと思います。これがなくなってしまうたら、珠洲や輪島や能登町、穴水から他の市町の方に行かなければいけないとなると、通学に大変時間がかかります。地元には高校があるということは逆の観点で、商工会、商工会議所とか、各団体、JAもごさいます。地域の教育の拠点であり、コミュニティの拠点としての活用という意味で、高校生がいてそこに地域の様々な学びの場があるということを保証するということは、それは県として必要な施策だと思っています。同時に、私も全国のこういった地域の実情を存じておりますが、島根県の隠岐島前高校とか、福島県のふたば未来学園高校など、全国的

に募集をかけて魅力のある学校作りをして、稀有で優位な人材を育成していこうという取り組みをすると、当然そのためには、施設としてどう考えても寮は必須ですね。こういったものを整備しながら、石川県で石川県の子どもたちを育てるだけでなく、石川県でここで学びたいという高校生を育てていく、そういった魅力化ということを検討していく必要もあると考えております。

今回の地震、豪雨等の災害がございました。であるがゆえに、能登という風土を活用して、この地域で学ぶことの意義、意味といったことを高校を拠点としてやっていきたいな、やっていくべきと、こういうふうに考えております。奥能登の高校魅力化ワーキンググループ、これをぜひ設置をして、幅広い意見をいただいて、具体案を入れていきたいと考えていますので、これについてはまたメンバー等も含めて改めて私から報告はいたしますが、今日この後先生方にもご意見いただきますが、大規模震災、また奥能登豪雨などの複合災害を踏まえて、この地域の高校と存続に関わる魅力化をどういうふうに進めていったらいいのかというご意見も今日皆さんにもいただきたいと思っております。

私どももワーキンググループを進めてまいります、そういうことするんだったらこういうふうにした方がいいよとか、こういったご意見もいただきたいと思います。

では、順番で、目が合いましたので、辻奈穂子委員からご意見をいただきたいと思います。

(辻教育委員) 私は先生ではないので、保護者の立場からしか言えないのですが、奥能登の復興探究コーディネーターの配置は、大人から見て、大人がどうしたらいいかっていう考えなんですけれども、今在学している高校生たち、本当につらい思い、大変な思いをいろいろして、思っていることがいっぱいあると思います。地元の魅力を知った、再確認した子もいると思いますし、その子たちが、その次の今の小学生とか、そういった子たちに何を残したいと思っているかっていうことを、高校生になると半分大人みたいなものなので、高校生たちの意見を入れながら、その下の学年の子どもたちに何を残したいと思えますかというワークショップなどもやってみて、コーディネーターの方にまとめていただいて、高校生が主体となって、僕たちの町に何があって、何が魅力で、何を残したいか、この子たちと何をしたいかを考えるっていうことも復興の活動として、やってみてもいいのではないかと思います。

(馳知事) ありがとうございます。我が国が子どもの権利条約を批准したのはいつでしたか、塩田さん。

(塩田教育参事) 明確に言えません。

(馳知事) もう27、8年前ですよ。国の方でも、子どもの意見表明権を認めて、それを踏まえて子ども家庭庁なども展開していますから、我々石川県でも条例も考えておりますが、子どもの考えていることをしっかりと聴取をするということについてはとても大事なことだと思いますので、そういう対応したいと思っております。続いてお隣の高野さん、お願いします。

(高野教育委員) 最初に知事の方から、奥能登の高校を減らさないと思ったので、それを言おうと思っていたので何を言ったらいいか悩んでいたのですが、2点お話ししたいと思います。

1つは、被災地の創造的復興に関してですが、実際に大きな地震を受けた5校と、そうではないそれ以外の高校と2つに分けて書いてあります。しかし、被災した5校の高校生が、創造的復興についてどんなテーマを取り上げられるのか、大人の私でもなかなか想像がつかないです。被災地以外の学校からは、地域に足を運ぶことによって、石川県の未来というものを第三者的に見ることができるかもしれませんが、当事者の高校の生徒は、具体的にどうしていいかわからないという気がしてならないです。

先ほどの説明の中で、5校の高校とつないで探究ネットワークを形成という話があったんですが、それぞれの地域があって、それぞれの学校に特色があるのに、5校をわざわざつないで探究ネットワークを形成するのは、どういうメリットがあって何をまとめるのかなと。学校それぞれに考えがあるのに、それを合わせることの難しさがあるのではないかなと思います。

とりとめのない話になりましたが、1点目は、実際に被災した5校の創造的復興をテーマにした活動というのは、なかなか具体的なテーマが自分には思いつかなかったということです。

もう1点は、5校を探究ネットワークでつなぐことに関して、どのようなメリットがあるのか、高校生にとってどんな得があるのか、もう少し詳しく聞きたいです。

(馳知事) 高野委員のご指摘について、まずコーディネーターのお二人に、現場に入られてご意見あれば伺いしたいと思います。また酒井教育長、実は奥能登の能登町出身なんです。地域性という観点が高校教育には重要ですので、酒井教育長からもテーマ設定等について、地元を代表して意見をいただきたいと思っています。まず、中川さん、木村さんお願いします。

(中川コーディネーター) ご質問いただいた2点についてお話しします。

どういったテーマがあるか、多様なテーマがあるんですが、私が見聞きしたものとしては、1つは発災直後にどういった対応が実際行われたのか、2024年1月から自衛隊や警察とか、そういった関係者がどういった対応したのか、それに対して高校生として何ができるのかということを考えることは一つテーマとして挙がっています。あとは、これから観光資源を増やしていく、観光を促進していくために、宿泊所が足りないという課題があるということに気づいた高校生が、仮設住宅をそれに転用できないかみたいなことを思っ、て、市町と対話したいというそういったテーマが実際ありました。

各地域を結んでいくことの意義に関しましては、オンラインで探究を横連携していく授業やっておりましたので、小規模な高校だったり地域の高校っていうのは生徒が少なく、小学校中学校とずっと同じ環境で上がってくる子たちにとっては、自分のクラスにいる人以外と話す機会は本当に重要でして、生徒同士にとっては、オンラインでいろんな人たち、もちろん対面も大事ですけども、対話していくことが生徒なりの気づきだったり、自分

がやっつてることへの自己肯定感が高まるという効果があるかなと思っています。

(木村コーディネーター) 私の方から震災に関する探究活動の事例としてですけれども、例えば起きてしまったことは仕方がないということですが、防災意識がやはり生徒たちの中でも高まってきていますので、どうしたらさらにこれから今後起きてしまうかもしれない災害に対して、できるだけ被害を食い止めるかということで防災意識を高めていこうというような取り組み、それを高校生の中だけではなくて、自分たちより下の世代あるいは地域の方々への防災意識の高まりの方に探究していくというようなこともあります。

それから震災そのもので社会環境が大きく変化していつているので、その中で地域をどういうふうに活性化していくのか、街作りをどうしていくのか、お祭りをどうやって活性化していくのかなんかも、高校生にとってはすごく大事な課題のように捉えているようです。それらをテーマとして探究している高校生もいるというのが現状です。

(馳知事) 酒井教育長。

(酒井教育長) 今ほどコーディネーターの方からも細かい具体例がありましたけれども、防災意識、災害対応といった一般的な災害そのものを契機として新たに考えるということもありますし、もし間違ってたらあれなんですけど、輪島だったら、復興朝市をテーマに、深堀し、まさに地域資源ですね、その地域の資源を深掘りしたテーマ設定というものもあったというふうに記憶してます。

だからいろんなやっぱりテーマ設定はあり得ると思います。地域に身近で発生した災害ですので、普段から見聞きしていることも含めて、いろんなテーマを設定されると思います。

またネットワークの意義ですけれども、これは別にテーマを何かに絞るとかですね、そういう意味では全くありませんので、それぞれがいろんな角度で、あるいはいろんな人とのネットワークの中でいろんな探究活動をしているのを報告なりして、あのやり方がいいねとかですね、さらにこのやり方もできるんじゃないかということの情報交換なりして、さらに探究学習を深めていくということにも繋がるでしょうし、同じ取り組みをみんなでやってるんだという、先ほど交流というお話もありましたけれども、そういう生徒間の横の繋がりといいますか、みんなが探究というものにしっかりと取り組んでるんだというそういう仲間作りの意義も大きいというふうに思っています。

(馳知事) はい、浅野副知事どうぞ。

(浅野副知事) まさに能登の土地の中で何があるのか。例えば珠洲ホースパーク、引退競走馬が余生を暮らす場所ですとか、あとは能登牧場さんですとか、その他オフグリッドの住宅が孤立集落になったときに、水や電気や熱をどれだけ自立分散で供給できる家にしていくかみたいな話とかですね、里山をどう治山していくのかっていうことを、取り組まれている皆さんとか、もう能登中各市町にいろんなプロジェクトがこの復旧・復興の前後でたくさん起こってきてます。それを神奈川の学校の先生たち数名と私、フィールドワーク

したときにも、そういうネタがもうゾロゾロ出てくると。それで多分学校の先生たちにとって新しい教科を何か作ってくださいとか、丸々学習が1個加わるっていうのは非常に嫌なことだと思うんですけども、理科とか社会とか数学とか、いろんな教科の中に溶け込ませて総合化できるプログラムは、正直ものすごい数できちゃうんじゃないかなと思っておりますので、そういったことをまさに先生たちと探していくことそのものが探究だと思いますし、それが何か地域の誇りというか、ここを見るだけで世界が見えるなということで自然の摂理がもう見えてしまうなど、深い学びができる場所が能登じゃないかなとは私も感覚で覚えております。

(馳知事) 高野委員、この方々のご意見を聞いて何かあったらどうぞ。

(高野教育委員) よくわかりました。ただ、終わった後の探究型のゴールというのは、学校で完結してしまうのか、それとも高校生なりに出たゴールが何らかの形で反映されていくのかっていう、その点に関してはどんなふうなってくるのでしょうか。

(馳知事) それは私か教育長が答えた方がいいと思います。私が考えてるのは、探究型の授業を体験する、教師から、あるいは教育委員会から与えられるだけではなく、自分には何ができるのか、何をしたいのかといったところから始まるのが、探究型のポイントです。そしてその体験が、必ず高校卒業した後の進路、人生における指針になっていく、そういうふうな導き方っていうのは私は必要だと思いますし、また、教育の現場でありますから、どう考えても評価しなきゃいけないんですね。その評価、点数をつける評価だけではなくて、その探究型の学びをしたことが、あなたの人生や、あるいは今後お金を稼いでいくということについてとか、家族を持つということについてとか、社会における関わりとか、会社で一員になるということにおいて、どういう意味を持っているのかということ、私は、そういう向上をしようとする意欲に火をつけることこそが大事な評価だと私は思っています。

ぜひ、こういう大災害を受けたからこそ、貴重な体験をした高校生たちに将来の向けての目標、あとはそこからふるさと愛を学ぶと、やっぱり家族の大切さとか、ふるさとのことをよく知る。歴史や風土、その上で自分は何をすべきか、何ができるのかと、そのことが個人としての成長とともに、地域の発展に資すると。そういうふうな目的を持って、この探究型の取り組みは、能登でこそ、能登でしかできない取り組みといったことを、私は導いていきたいなというふうに思っています。

では続いて新家さん、お願いします。

(新家教育委員) まずは、コーディネーターのお二人の行動に敬意を表したいなと思います。知事のお考えもよく理解できました。

今までの議論と関係があるのかなのかってちょっとよくわかりないですけども、3つお話ししたいんですけど、1つ目は、ここ数年で高校のあり方が大きく変わっている。その原因っていうのが、1つは能登半島地震や豪雨、もう1つが高校の学費の完全無償化で、もう1つはですね、子どもの要求の多様化。

1つ目の震災関係というと、奥能登の人口がものすごく急激に減っている。心配するのが、能登から出ていく方が非常に多いんじゃないかなっていうことを、ものすごく危惧しています。

私立の高校も無償化ですから、費用がかからない。寮さえあればそこに生活できるわけなんで、若い人たちがどんどん奥能登から出ていく。そういう危惧をものすごくしています。

3つ目なんですけども、子どもの意識がものすごく変わってる。先日甲子園がありましたけれども、富山の代表が未来富山学園、生徒数が25名で野球部が23名、残りの2人も単位を取るために、元野球部員ってということで、本部が愛媛県の松山、要は定時制で分校みたいなスタイルなんですね。その関係でちょっと調べましたら、石川県内で12校定時制の学校があるんですよ。その中でもう1つ言うと、今10人に1人が通信制に通ってるっていうそういう実態もあって、様は、私の頭の中にある高校が大きな建物が1つあって、そこで生徒がみんなで部活やったり、ごちゃごちゃやってるっていう、そういう時代がどんどんどんどん薄れてるのかなっていう気がしてます。

そういうことを踏まえて、3つのことを踏まえて、教育振興基本計画、これは5年サイクルなんでこれはいいと思うんですけども、10年先、15年先を見据えたビジョンみたいなものが、これからちょっと考えていく必要があるんじゃないのかなって、それは県だけではなくて、先ほどからお話が出てます市町の方とか、商工会とか商工会議所とか、企業の方、私も企業ですけども、地元の人たちと一緒に10年15年先を見据えて、今どうすればいいのかっていうことを協議をするところに来てるのかなっていう感じを持っています。それが高校のあり方がここ最近すごく変わってるということと、2つ目が、高校は、学問を教えるところであることには変わりはないわけですけども、1つは人間形成をする場であることも重要だと考えています。

最近ストレスがものすごく多い時代で、その結果としてかはよくわかりませんが、例えば不登校であったり、社会人でも心痛む人がいたり、そういうストレスが非常に大きい時代。そういうときに、高校は何をすればいいのかっていうことを考えると、やっぱり高校は自分の人生の先を考えた人生のビジョンを高校生に具体的に自分の人生プランを作って欲しいなと、そういう時期じゃないかなというふうに思っております。心を安定させて、自分の人生を前に進めるために、耐える力として忍耐力というものをどうやって高校生たちに、今震災を受けた高校生にまた忍耐かっていうとすごくかわいそうな気もするんですけども、だからこそ忍耐力を養う年代じゃないのかなと。で、その結果として、自分で経済的に自立して、家庭を持って、稼いで、家族を養うっていうことを、何かその辺が、最近よくニュースなんかで今年も出ましたが、4月に入社して、2、3日で退職するみたいな、その辺の忍耐力をもとにした自分の自覚っていうものを植えさせる。これは能登だけではなくて、石川県全体がそういう教育であってほしいなと、そういうふうなことを願って、そのためにもやっぱり10年先15年先を見据えたビジョンみたいなものが必要なんではないのかなっていうふうに考えてます。以上です。

(馳知事) ありがとうございます。続いて眞鍋さん、お願いします。

(眞鍋教育委員) 最初に教育振興基本計画についてなんですが、今回子どもの意見聴取をしっかりとやるということで、もう6月から9月になってるのもう終わってるのかなと思うんですけども、具体的にどのような調査をしたのか知りたいところなので、まずそこを聞いてもよろしいでしょうか。

(馳知事) とても大事なポイントだと私も思いますので、これお答えできる方。

(北島教育次長) 教育振興基本計画の策定にあたっての子どもたちのアンケートについてお答えしますと、まず対象児童生徒ですが、県内の小中高等学校に在籍する小学校4年生以上の子どもです。例えば小学校でしたら4年生から6年生は石川県で約28,000人おるんですが、回答いただいた数が、15,900ですから54%近くから回答をいただきました。それから中学生ですけども、県内では約29,000名おります。その中で回答いただいたのが16,000で、これも56%近く、かなり大きな数字だと思います。それから高等学校等については約30,000人近くいるんですが、その中の約9,400と、約30%の回答をいただいております。

それで中身、どんなアンケートをしたのかということでございますけれども、例えば「授業の進め方に関して、あなたはどのようなやり方であれば、学習内容がもっとよくわかるようになると思いますか。」という学習に関すること。それから例えば「あなたが良いと思う先生はどんな先生ですか。」というアンケートも行いました。それから「誰もが通いたくなる学校とはどんな学校だと思いますか。」というアンケートも行いました。そして今アンケートの話をしましたけども、併せて対面で子どもたちといろいろな意見交換をしたいなと思ひまして、子どもたちとのラウンドテーブルを同時期に開催しております。小学校は3校、中学校も3校、特別支援学校は2校行っております。高校はまたこれからも続く予定です。以上です。

(眞鍋教育委員) ありがとうございます。結構たくさん回答いただいて分析が大変かと思いますが、これやっぱりアンケートに回答してくれた子どもたちに、あなたたちの意見がどのようにこの計画に反映されたのかをフィードバックをしてあげるってことが非常に重要だと思うんですね。それは例えば、この計画ができましたよっていうお知らせだけじゃなくて、やっぱり子どもたちにわかりやすい言葉で、わかりやすいリーフレットのようなものなり、ホームページを作るなりして、あなたたちの意見がどこに反映されてるか、あるいはちょっと他県のことを調べてみましたら、岩手県で同じような基本計画を作るときに、意見を聞いて終わりにせず、県からの回答を全部発表している。それは教育委員会だけでなく他部局も回答をしていて、それをチラシを配ってホームページに載せてますよっていうこと伝達した。そういう先進事例の良いところを取り込んで、ぜひフィードバックっていうのをしっかりしてあげて欲しいです。そのことは多分子どもたちの自己肯定感を上げることにも繋がると思いますので、ぜひ、大変な作業になるかと思いますが、そこまでやっていただきたいなというのが、計画についての意見になります。

それからもう1つ、高校魅力化の方ですけども、実は今日は高校魅力化をぜひ進めるべきと言おうと思って準備してきたんですが、最初に知事の方から、これはやりますとい

うことだったので大いに期待したいですし、本当に今日はコーディネーターのお二人から能登の現場の声、先生方の声っていうのが、こういう場で初めて聞けたっていう画期的な会だっていうふうに思っております。知事は能登という風土を活用して、この地域で学ぶことの意義、意味といったことを高校を拠点としてやっていきたいという意味での魅力化とおっしゃってるので、そういう面で考えると、今の現場の先生たちのウェルビーイングが非常に低い状況みたいなのを聞くと、とても苦しいですね。まずそこから何とかしてあげてくださいと。どこをどうしたらいいかっていうのはもちろん事務局で考えていただきたいですけども、まずそういうところを、自分たちの高校の強みとか魅力が何かっていうことを考える土壌を作るというか、そこからまずしっかりやっていただきたいなっていうふうに思います。

この高校魅力化っていう方向がしっかり打ち出されれば、やっぱり地域活性化とか地方創生の核としての高校っていう位置付けになると思うんですね。奥能登で言えば、創造的復興の核を担う高校っていうことになりますし、そうすると高校を中心にしてさっきから商工会とかJ Aとかという話が出てきてますけれども、大学もそうだし、企業それからNPOなんかも多様な主体が連携して高校を核にして地域の全体の活性化をするっていう発想に持っていけると思うんです。この高校魅力化っていうのを打ち出せば。それはやっぱり市町であったり、地元がどう考えているのかっていうことを知りたいです。その中で今日コーディネーターのお二人の業務の中に、市町や地域の関係団体に対して、学校との連携に向けた要望の聞き取りっていうのが取り組み内容に入っておりますので、例えば地元が高校に対してどう考えているのかとか、そういうところを丁寧に拾っていただいて、そのワーキングに地元もしっかり入っていただく。そしてやっぱり5年間の計画ではなく新家さんが言ったような10年15年20年の能登の教育のグランドデザインみたいなものをしっかり描いていくように進んでいくことを期待したいと思います。以上です。

(馳知事) 眞鍋さんありがとうございます。またこの知見で、お二方のご意見を踏まえて、木村さんと中川さんからコメントがあればどうぞ。木村さんからどうぞ

(木村コーディネーター) 地元の自治体の考えを、今我々も回ってヒアリングをしているところです。これまで私もずっと関わってきましたけれども、能登高校は能登町ともう密接にずっと協議を重ねて、高校の魅力化を町も一緒に応援して頑張って汗をかいてやってきている自治体です。また今私の方でヒアリングをしているのは珠洲市の飯田高校ですけども、飯田高校も珠洲市と協力してこれから高校魅力化をやっていききたいと高校側の意思もありますし、それから自治体側としても協力をしていきたいとは思っているけれども、ここからもう少しいろいろ細かく考えていかなければならないなというようなことを、各市町にもっとヒアリングを重ねていく必要がありますし、それから検討の中身に私達も入ってサポートしていく必要もあるかなと思っておりますが、ここから各自自治体の協力、あるいは地域の協力を得ながら高校を核にした地域の活性化に取り組んでいける、高校の魅力化に取り組んでいけるように進めていければと思っています。

(中川コーディネーター) 今申し上げたとおりですね、高校と市町が同じビジョンを持

って取り組んでいくことが重要だなと思っておりますので、既に高校魅力化が進んでいる地域が多くありますので、そういった事例を参考にしながら、どういうプロセスで進んでいけばいいのか、何を指すのかっていうのをしっかり市町と対話をしていく。また真鍋委員におっしゃっていただいたように、地元の方の声も拾っていくってことを頑張っていきたいと思いました。ありがとうございます。

（真鍋教育委員） ぜひ頑張っていたきたいんですけど、もう1つ言うこと忘れてました。大学をもっと活用してほしいなと思ってまして、私もよく呼ばれているんな高校の探究のアドバイスが入ったりするんですけど、割と金沢の方の高校は気軽に大学の教員を呼んだりするんですけど、やっぱり距離があるからか能登の高校と大学のサポートっていうのはちょっと薄いような気がしていて、ぜひステークホルダーの1つとして大学っていうのも考えて、せつかくこれだけ高等教育機関が金沢の方には集積しているわけですから、ぜひ大学の力も活用していただきたいなと願ってます。

（馳知事） 昨年から明確にサテライトキャンパス構想を能登で展開し、昨年350名ほど。今年は700名を目標に、もちろんボランティア活動や、プログラム教育や、また10日から2週間滞在していただければ単位取得も可能となりますので、ゼミナールの活動とか、様々していただこうと思っております。実際もうスタートしていますので、ぜひ先生おっしゃったように大学生と高校生との交流事業等も含めてですね、そういう機会を持っていきたいと思っています。たまたま3月でしたっけ、東大のラグビー部が来たのは。

（浅野副知事） そうです。

（馳知事） たまたま今年の3月、東大ラグビー部が。浅野さんが東大ラグビー部出身なので、声をかけて、20名ほど入ってくれてボランティア活動と、それから飯田高校に行って高校生との対話、また体を動かすという、ラグビーチームですから、一緒に体を動かしたり、トレーニングセッションもやったり、キャリア教育等についてのセッションもあったりして、その後実は夜帰ってきた大学生と飲み会で話聞いたら、大学生も実は感化されて、非常に良かったというふうに言ってくれました。いろんな意味で、能登の高校を選んだ高校生たちが、その中から東大に行ったり、医科大に行ったり、あるいは地元の企業に就職したりとか、あるいは金沢に多いですけど専門学校に進学したりとか。やっぱり何をして生きるのかと、自分の使命感は何なのかとか、そういうモチベーションを得られる機会というものも大学生との交流によって、私はそういう場を提供することが大人の責任かなというふうに思っております。改めて、何でもかんでも全部ぶち込むというわけにもいけないので、タイミングを見てですね、1年間の年間指導スケジュールの中で効果的にこうした交流事業もぜひやっていきたいと思っています。ご指摘ありがとうございます。では続いて、新屋さん。

（新屋教育委員） 私も、既に出てる意見と重複すると思うんですけども、信頼される学校づくりとか、生徒が減少していく中での高校の魅力化、特に能登の高校ですけど、能

登だけではなくて加賀地区にも金沢にも生徒が減ってる学校あります。そういった現状の中で、本当に魅力のある学校、それから信頼される質の高い学校、どういう学校だったらそういうふうと言えるのかなと思ってるんですけども、能登の5校の話が中心になってしまうと思うんですけども、生徒が非常に減ってる中でも、生徒1人1人のニーズっていうのは多様だと思うんですね。そして、今創造的復興の教育の中で、探究学習確認して、いろんなネットワークでやっていく意向としても、それだけで果たして学校が存続できるのかなっていう、非常に心配っていうか不安な面もあるんですよ。なので冒頭知事言われましたように、能登の5校の再編とか統合をしないっていうことは前も言われてましたので、私もなんとかしてそういう能登の小規模な学校が残る道はどうしたらいいんだろうっていうようなことを時々考えてもいるんですけど、やっぱり全国にも例がありますけれども、もう生徒も減るし、小規模なんて先生も少ないし、あるいは地域からも人口が流出していくそういう中で、やっぱりそこでいろんなネットワーク作って、いろんなことをやろうとすると、ICTとかAIとか、そういうものを積極的に使って広がりを作っていくというようなことしか私には思い浮かばなかったんです。全国にもそういうことをやってるところは多々あると思うんですけども、知事がワーキンググループ作られると言われましたので、ぜひですね、全国でやってることも参考にさせていただきたいんですけども、それにとどまらずに、本当に能登の高校が存続できるような斬新というか、いいアイデアを出していただいて、頑張っていけるようにしてもらいたいなというふうに思ってます。以上です。

（馳知事） ありがとうございます。やはり、能登の高校の魅力化に集中してしまいましたが、教育振興基本計画についてのご意見があれば、特に、実は私も政治的な立場にいましたんで、気になっているのは、高校無償化、私学の1人勝ち、公立高校のより一層の衰退と、こういう指摘をされています。私は心配しています。私学はより一層魅力を向上させて、本来ならば、まさしく地域において残していかなければいけない役割を持っている公立高校の魅力化がなかなか厳しくなるのではないかと。こういう議論の中で、公立高校のあり方についても、これは全県の話ですから、何らかのご意見をいただければありがたいと思います。また辻さんの方からお願いいたします。

（辻教育委員） まさに今うちの息子が中3の受験生なんですけれども、私小松なんですけど、公立は、ナンバー1の学校はやっぱり人気があるんです。ただ、ナンバー2, 3, 4になると、もうみんなそこを選ぶのであれば、私立のどこそこの方が絶対いいと、保護者の中でも噂というか、ママ友の中でも全部そうなってしまって本当恐ろしいなと思うんですけど、じゃあどうしたらいいかっていったら本当に難しい問題で、私立も私立ですごく頑張ってる、上と下がすごい差が激しいんですけども、上の高みを目指す、特進クラスみたいなところはすごいできますし、そうじゃない子も拾うっていう、そういう上と下の差は激しいんですけども、やっぱり公立の2番3番4番の高校っていうのはすごく難しいだろうなって。うちの息子も今年の夏、体験入学で公立の1番も2番も3番も行きましたが、「2番3番は何かね、、、」みたいな感じが現実なので、本当に私としてはちょっとわからないなっていうのが本音です。

(馳知事) 今度またママ友の情報も仕入れといってください。高野さん。

(高野教育委員) 私立の学校の場合は、生徒がこの私立にしたいというふうを選んで、そして受けてると思うんですよ。でも公立の場合は、行きたい学校もありますけど、入れる学校が最優先にくると思うんですよ。だから石川県の場合も、その高校の単願ではなくて、できるだけ自分の行きたい魅力的な高校に学力差でチャレンジができるような併願制で、第1希望に行きたいんだけど、落ちたら仕方なく2番目行くっていうそんな形でやってもいいような感じで、もう少し高校を選べるような自由度を受験段階で作った方がいいんじゃないかなと思います

(馳知事) 続いて新家さん。

(新家教育委員) 公立高校自身がもっと外にでてアピールすべきだろうなというのが1つ、ものすごく思います。例えば私立であれば、いろんなコースがあつてこういう子どもたちがこういう生活をしているっていうことを一生懸命PRしている。公立はどういうPRをしてるのかっていうのは、ちょっと劣るのかなっていう気はします。例えば私立であれば、特進コースがあつてこういう実績がありますよと。やっぱり公立をもっとPRしなきゃ駄目なんだろうと、何回も言ってますけども思ってます。

知事はよく、1人も取り残さない教育とか県民生活でもそう言われるんですけど、公共はやっぱりそうあるべきなんだろうという自覚はしてるんですけども、最近やっぱり会社入ってくる新入社員でも自分を伸ばしてくれる会社を選ぶ傾向があります。給料もそこそこで残業もそこそこで、プラス自分伸ばしてくれる企業を選択すると。やっぱり高校も1人も取り残さないっていうのは前提としてあるのかもしれませんが、自分を成長させてくれる高校っていうのはどういうふうなのかなと。これは多分先ほどの議論の高校の魅力化と一緒に話なんだろうと思いますけども、そういうことをもうちょっと考えて、公立高校として授業を教えるっていうだけではなくて、いかにPRをするかっていうことをもうちょっと前提として考えるべきだろうと。今のこの話題もそうなんですけども、実はうちの孫1人が金沢の泉野の幼稚園通ってるんですけども、しばらくすると入園を停止するんですよね。金沢の泉野でもそうなんですよね。だから本当に全県的に、このことをもっと真剣に、今皆さん真剣に考えているのは事実なんですけども、人口減というのは非常なスピードでやってくるということを念頭に置いて、じゃあどうすべきかっていうことをやっぱり考えていかないといけないんだろうなというふうに考えてます。以上です。

(馳知事) ありがとうございます。眞鍋さん。

(眞鍋教育委員) 奥能登の高校にとどまらず、多分全ての高校が魅力化、差別化して個性を磨くことが必要で、例えば加賀市さんは自治体として、3つの高校ありますので、高校魅力化やってらっしゃいますよね。それ以外ですと、例えば専門高校さんは多分非常に差別化・個別化しやすいし特色も出しやすいし、私も産業教育フェアとか出させていた

いてて、各校でとても取り組み熱心にされてるのも存じてます。そうすると普通高校、さつき辻さんが言われた2番か3番か4番か5番かわかりませんが、そういうところの強みとか、差別化・個別化っていうのはどうしていくのかなっていうのは難しい問題で、考えないといけないだろうなと思います。このまま1クラスずつ減らしていけばいいっていう問題ではないと思います。以上です。

(馳知事) ありがとうございます。新屋さん。

(新屋教育委員) 私は、元学校の教員で高校教育に結構関わってしまして、公立高校は全て回ったこともあるんですけど、先ほど新家委員が言われましたように、私学と比べると、ここ数十年そうですけど、部活動とかっていうと、もう私学が圧倒的に表に出てきて、公立の学校の部活動での活躍のイメージがあんまりない。だから、部活動に魅力感じているような子だったら私学がやっぱり先に頭にくるかもしれないなと思ってます。ただもつとですね、公立の高校でも進学校があれば専門高校もありますけど、きちっと教育をして、出口のところで進学であれ、あるいは就職であれ、そこを比較してもらおう。私学が別に悪いっていうわけじゃないんですけど、公立もすごく丁寧なことをされてるので、その辺がやっぱりアピールっていうか、県民にうまく伝わってないかもしれないなっていうことは1つあります。

それからもう1つ。再編の話はしないっていうことだったんですけども、私は加賀市に住んでるんですけど、公立高校が3校あって、それに定時制もあります。4つもあります。それでその4つの中で生徒が分散して、小規模になってるわけですけども、そういうまままで本当にいいのかなっていうふうに思ったときに、全国の事例でいうと、最近定時制と通信制を合わせたような学校であるとか、あるいは全日制と定時制と通信制を合わせたような学校であるとか、いろんな新しいタイプができてますので、そういった学校をもう1つ何か考えて、別に4つを1つにしまわなくても、4つそれぞれ残しながら、1つの本部みたいなところでやっていくみたいな、そういうのもあるのかなというふうに思いました。

(馳知事) ホールディング方式。

(新屋教育委員) そうですね。

(司会) 知事、そろそろ時間が迫ってきてまして、締めに向かっていただければ。

(馳知事) 実は特に新家さんの話をお話聞いてたら全くそうだなと思うと同時に、だとするならば公立高校で魅力化と考えたら、トップリーダーである校長の人事が、3、4年で替わるのは私はどうなのかなと思うんですよ。少なくとも2ターム、1ターム3年ですよ、1、2、3。卒業生を送り出す。2タームなら6年。6年ぐらい落ち着いて、その高校の校長をしっかりとやらせるという方針があって、魅力化と言いながら高校の校長の人事って今平均して何年ぐらいでやってるんでしょうか、これ塩田さんに聞いたらわかる？

(塩田教育参事) 2～3年で替わっていると思います。

(馳知事) ですね。それでその学校の雰囲気とか歴史を把握して、また周辺の中学校や高校等と連携しながら、それでやっていけるのかなという、せめて2タームくらいの余裕は持たせて、権限というか方針をね、ブラッシュアップしながらやっていくっていうのも1つの考え方ではないかなと思うんですが。やっぱ私学の場合には、校長5年10年替わらないですね。先生も替わらないですね。進路指導もずっとその方針ですからなかなか太刀打ちできないですね。魅力化という意味では。この点、酒井教育長にお考えをお伺いしようかなと。いかがでしょうか。これ最後です。

(酒井教育長) 今の時点で明確なことは申し上げられませんが、私も思ったのは、それぞれいろんな魅力があるので、委員からもありましたけれども、皆さんと同じですね、やはりそれぞれの、まず魅力をしっかりと、それぞれ小さい大きい別にして、いろんな魅力あると思うので、それをまずしっかり磨き上げることと、きちっと発信することだろうと思います。

真鍋委員からもありましたけど、専門高校は結構アピールしてるんですよね、フェアがあったり体験会があたり。普通高校はそれに比べるとなかなか難しい部分ありますけど、何らかの形で、ここはこんな面白いことやってると、こんな子が育つよっていうのをうまくしっかり発信していかないといけない時代になってきているのかなというのが1点です。

知事からありました人事の話は、そういうやり方もあるのかなと今思いましたので、別に校長としてっていうか、教頭というところもあると思うので、通算っていうこともあるのかもしれないので、しっかりその高校の経営としてやっていけるのか、そういう観点からも考えていきたいと思います。

(馳知事) すいません、ありがとうございます。これ経営者ならわかると思いますけど、経営者は株主もいますから大変ですけども、人事権と予算権をしっかりと行使をする。それもやはり、教育の現場でいうとせめて2ターム6年間、これ1つあるとですね、うちの高校はこれでやるんだと、みんな協力してくださいと、校長先生や教頭先生が、やっぱり公明正大にそれを発表できるとみんなも協力しようという体制、私学の強みはおそらくそこだと思うんですね。1つの選択肢として私の提案ということで、教育長にも受け止めていただければいいと思います。

高橋部長からそろそろ時間ですということでありましたので、今日貴重な機会をいただきまして、本当に意見交換できてよかったと思います。ではマイクの方を部長の方に戻します。ありがとうございます。

(司会) 改めまして本日は忌憚のないご意見を頂戴いたしまして大変ありがとうございました。時間が迫ってまいりましたので、こちらをもちまして石川県総合教育会議を閉会したいと思います。皆様長時間にわたりまして本当にありがとうございました。

(馳知事) どうもありがとうございました。